

# 東南アジアの文化 — 多様性とダイナミズム —

京都大学 副学長  
東南アジア地域研究研究所 教授  
農学博士

河野 泰之



## 1. はじめに

「文化」というお題をいただいてたじろいだ。その瞬間、文化人類学や Cultural Studies というような言葉が頭に浮かんだ。私は、大学院では農業土木学を修め、その後は東南アジアの農業・農村や自然資源管理を研究してきた。「文化」を正面から取り上げて研究してきたわけではない。しかし、40年近くにわたって東南アジアを歩き回ってきた。フィールドワークでは数多<sup>あまた</sup>の現場を歩き、多くの人々と話をしてきた。農村の幹部や農民などへのインタビューは優に千回を超えるだろう。それを踏まえれば、人々が何を考えながらどのように生きているのかといった意味での文化を語ることにいくばくかの意味はあるだろう。ここに述べることは、このような考えから記したものである。

## 2. 一つの地域としての東南アジア

東南アジアを一くりにするのは難しい。東南アジアは、近い将来に ASEAN 経済共同体に加盟する予定の東ティモールを含めると 11 か国からなると考えるのが一般的だ。それぞれに公用語がある。マレーシアとインドネシアの公用語がほぼ同じであることを除けば、それぞれが異なる言語を公用語としている。人々が話しているのは公用語だけではない。約 1 500 の言語が現在でも使われているといわれている。民族が多様だと言い換えてもよい。さまざまな民族が多言語空間で共存している。宗教はどうか。世界三大宗教と呼ばれる仏教、キリスト教、イスラーム

ム教が人口のおおよそ 30%、20%、40%を占める。これら以外にもヒンドゥー教やアニミズム、さまざまな新興宗教がある。東南アジアでは、日常生活における宗教の意味は日本と比較して格段に大きい。宗教実践の在り方はさまざまである（第 1 図）。要するに、言語とか民族とか宗教というような文化の王道において、東南アジアは多様であり、一くりにすることはできない。それにも関わらず、東南アジア的なものはある。それは何か。

東南アジアの地域としての特徴の第一は、中国とインドという世界の人口中心に挟まれた地域である、ということである（第 2 図）。これは今日だけの状況ではない。中国とインドは人類の文明が勃興<sup>ぼっこう</sup>して以来、世界の人口の中心であり続けてきた。すなわち、ここから技術が興り、商業ネットワークが広がり、人々が新たな土地を求めて拡散してきた。東南アジア社会はそのような動きによって形成



第 1 図 1980 年代のタイ東北部農村のお寺にて（農村で調査するためにはお寺への寄進が欠かせない）



第 2 図 インドと中国に挟まれた東南アジア（出所：<https://www.google.co.jp/maps/@8.8601466,110.2485635,5344215m/data=!3m1!1e3>）

されてきた。東南アジア社会の基層を築いたのは、このようにしてインドや中国から東南アジアにやって来た人々だし、東南アジアのとりわけ町では、歴史的なうよきよくせつ（余剰曲折）はあるが、インド系や中国系の人々が常に行き交い、自然と暮らしている。

もう一つの特徴はその自然環境にある。インド亜大陸からユーラシア大陸の東縁に広がるモンスーンアジアは、大きくいうとチベット高原を含むヒマラヤ山塊と太平洋やインド洋に囲まれた地域である。この地域に、インドではガンジス河谷とデカン高原、中国では中原という傾斜の緩やかな広大な土地が広がる。これが両地域における大規模な文明の勃興の基盤である。これに対して東南アジアの大陸部は、紅河、メコン川、エヤワディ川などの大河が形成する河谷からなる。一方、とうしょ（島嶼部）は、かつてのスダ陸棚が水没し多島海を形成している。地形のスケール感は日本に近く、インドや中国と比較すると山地、丘陵地、デルタが細かな単位でモザイクを構成している。このような自然環境の多様性が東南アジアの文化の多様性を支えてきたのである。

このような歴史的、環境の基盤こそが東南アジア社会を特徴づけている。

### 3. 東南アジアの適応力

文明の縁辺で、さまざまな人々が行き来し、多様な自然と文化を享受する社会とはどのような社会か。

最初に思いつくキーワードは「適応」である。私が所属する研究所では、かつて、「外文明と内世界」と題する研究会があった。「外文明」は、常に、先進的で強力で高貴でさえある。ときに暴力的であり、ときに寛容さを示す。「内世界」は、「外文明」に対して少なくとも表面的には無力である。正面から対抗することはできない。だからこそ「内世界」は、「外文明」のおいしいところだけを選択して取り込もうとする。それにより「内世界」そのものが変形することを厭わない。これは、欧米諸国による植民地支配にも、第二次世界大戦後のわが国の東南アジアへの経済進出にも当てはまる。冷戦構造が崩壊し、国内においても国際関係においても政治的、経済的な制約条件が緩和されると、東南アジア社会のもつ適応力が国レベルのみならず、民間セクターや個人のレベルでも遺憾なく発揮され、それが、一方で急激な経済発展を支え、一方で自然資源の搾取や環境破壊を生んでいる。

マレーシアやインドネシアの沿岸部には広大な熱帯泥炭地が広がる。熱帯泥炭とは、海進や海退により過去数千年にわたって陸地と水没地を繰り返してきた土地で、地表の数メートルから十数メートルは水と未分解の有機物からなる。いわゆる土壌はない。足を踏み入れるとずぶずぶと沈む。だから、1990年ごろまではほとんど利用されていなかった。そこに目を付けたのが原料生産地を探していた製紙産業であり、オイルパーム産業である。これらの民間セクターはグローバルな巨大市場を相手にしている。当然な

がら、高度な土木技術を駆使することができる。圧倒的な経済力と技術力である（第3図）。地元社会にとっても一気に地方開発を進めるチャンスである。数百万ヘクタールに及ぶ熱帯泥炭地の過半が瞬く間に造林地とオイルパーム園に改変された（第4図）。地元の政府や関連産業はこれにより潤う。住民もこのチャンスを見逃さない。民間企業の開墾により、その近傍の土地条件も改善され可耕地となる。そこを目標けて、農民が遠方からも入植し、オイルパームを栽培する。地域社会のさまざまなプレイヤーが製紙産業やオイルパーム産業の投資と開発にすぐさま反応し、自らの将来を切り開いている。

しかしこの開発にはとんでもないしっぺ返しが待っていた。熱帯泥炭地の開発の基本は排水である。その結果、それまで水没していた未分解の有機物が地表に現れる。これが乾燥するととてつもなく燃えやすい。熱帯泥炭地火災は健康被害や交通機関の乱れなどの煙害を広範な地域に与え



第3図 熱帯泥炭地の開墾により造成された植林地（インドネシア・リアウ州にて、2009年4月筆者撮影）



第4図 広大なオイルパーム園（インドネシア・リアウ州にて、2013年撮影）

ている（第5図）。インドネシアは世界第3位の温暖化ガス排出国となった。なぜ、この事態に対処できないのか。それは「外文明」が処方箋をもっていないからである。熱帯泥炭という特殊な環境をどのように利用するのかは、東南アジア社会が自ら考えるべき課題である。

#### 4. 個と人間関係が支える東南アジア

もう一つのキーワードが「個と人間関係」である。ここでいう「個」は、西洋近代における「個」という意味ではない。組織に依存しないという意味での「個」である。東南アジアの人々の行動規範は政府や企業のように制度化された組織が示すルールではなく、インフォーマルなネットワークや二者関係で蓄積され、練り上げられた知恵である。これらはそれぞれ、いわゆる科学知と経験知に似ている。科学知は客観的データに基づいて構築されたものだが、その前提となった条件が成り立たない状況下では効力を発揮できない。経験知は必ずしも最適ではないかもしれないが長年の試行錯誤を経ているためにさまざまな条件に柔軟に対応する術<sup>すべ</sup>を教える。

タイ東北部はメコン川流域でありながら水源に乏しく、タイで最も貧困な地域である。多くの住民が天水に依存して稲作を営んでいる。私は1983年にタイ東北部の一農村に7か月間住み込んで稲作の調査を行った（第6図）。その村のコメの生産量は年によって大きく変動していた（第7図）。数年に一度は大豊作だが、そのほかの年は干ばつや洪水により壊滅的な被害を受けていた（第8図）。アベレージヒッターではなくホームラン狙いの稲作だった。とはいえ、稲作の収益はあまりに低いものだった。私たちの調査の直後からタイは高度経済成長に突入した。村



第5図 火災より消失したオイルパーム園（インドネシア・リアウ州にて、2013年撮影）



第 6 図 現地調査中の筆者（1983 年撮影）

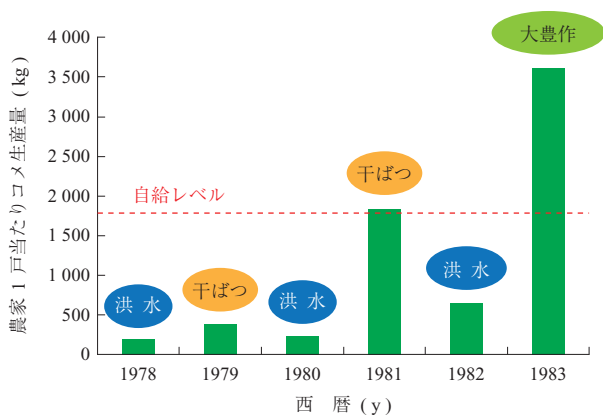


第 9 図 第 6 図に写っている村人と久しぶりに再会（2018 年撮影）



第 7 図 1980 年代の田植え風景（農外就業が増えると労働力を節約するために直播が導入された）

人の農外雇用機会は増えるだろうから、村人は、早晚、離農するだろうと私は予想した。ところが、話はそうは進まなかった。村人は、高度経済成長の恩恵にあずかって農外就業を増やしたが、同時にコメ生産の増加も実現した。なぜ、このようなことができたのか。それは、制度化された農業普及のモデルであるパッケージ化された技術改善によるものではなかった。個々の農家が、労働力や投資や情報などの個々の制約条件のもとで最適化を図った結果だった。そのため、農家レベルでみると、アベレージヒッターへと転向しつつある農家もあれば、今でもホームラン狙いを続けている農家もある。この村の稲作のダイナミズムは、このような多様性が生み出したものだった。



第 8 図 タイ東北部一農村におけるコメ生産量の経年変化（調査結果より）

## 5. おわりに

私たちは今、人新世と呼ばれる新たな時代を迎えようとしている。世界文明の中心が発展モデルを構築し、それをほかの地域社会が倣うことによって、人類社会全体が発展するという構図は崩れていくだろう。さまざまな不確実性に対処しながら発展していくためには、世界の多様なプレーヤーがそれぞれの潜在力を発揮して、さまざまなダイナミズムを生み出していく必要がある。東南アジア社会の多様性と適応力は、これからの世界の在り方を考えるための一つの出発点を示してくれている。